ISSN 1341-4364

近世哲学研究

第 18 号

二世界解釈と二側面解釈 —— 千葉　清史　1
——そもそも何が問題だったのか？——

京都学派の哲学史的洞察 —— 浅沼　光樹　36
——西谷啓治の卒業論文「シェリングの
絶対的観念論とベルグソンの純粋持続」について——

2014

近世哲学会

編集後記

今年はますますせわしない思いのする年末年始だった。そんななか例年通り本誌を発行することができたのでホッとしている。しかしそのため編集実務に当たられる方々に大変な労力をご提供いただくことになった。大事な研究時間を割いてくださったみなさんにあつくお礼申し上げる。またご多用のなか玉稿をお寄せくださった浅沼、千葉両先生にはこころから感謝したいと思う。まことにささやかな本誌ではあるが、「研究論文」を発表するための場としてお支えくださるよう、各位にまずお願い申しあげる次第である。なお本誌に先立って西洋近世哲学史研究室の機関誌『PROLEGOMENA』の第五号もネット上に公開されている。こちらは外国語で発信することの試みである。ご高覧を賜れば幸いである。

イギリスの歴史家ニール・ファーガソン(一九六四年生まれ)が現代日本を評してステートがネーションを食い尽くしつつある、いう言い方をしている。これはビヴァリッジ案に基づきつつそれを超えたという日本の福祉制度を一例とした話なのだが、サッチャライトのファーガソンの意図を離れて利用できる観点だと思う。法学では領土と国民と主権とをステートの三要素として挙げる習わしだが、この定義に照らしてステートの弱点もまたはっきりしている。ステートはこの三点に関しては融通が利かないのだ。どんな弾丸黒子の無住の地であろうとも、それが領土である限りは絶対に死守しなければならないと思い詰めるのがステートである。戦争であろうと、福祉国家であろうとステートは自分が授けられた使命をどこまでも愚直に果たし続けるほかない。日本近代のステートは非常に効率的にその目的を果たしてきた点でたしかに模範的なマシンであった。しかしステートはあくまでもネーションにとっては機関でありいわば道具である。ファシズムやコミュニズムと違ってデモクラシーではステートとネーションとは別物である。ステートがネーションにもたらす利害得失を冷徹に考量することをネーションの側としては怠ってはならないだろう。

そこで気になるのはステートと大学教育という業務との関係である。この局面ではステートの窮屈さというよりは、最近の状況はむしろその劣化を告げているのではないだろうか、というのが私の実感である。まえは大学教育において創意工夫が生まれるための経常面の整備と確保がステートの役割だった。ところが近年はその自制を放棄してその場限りの事業の乱発を使命と勘違いしているようにも見える。ここでもネーションがステートに食い尽くされてしまわないように、大学教育の論理が再構築されるべき時だと思うが、いかがだろうか。

(F)

『近世哲学研究』（既刊目次）

第一号（一九九四）

祝辞　酒井　修

ハイデッガーにおいて哲学を　田中　敦
——現存在の現象学的存在論考究——

カントと初期フィヒテとの接点　北岡　武司

義務論としてのカント倫理学　蔵田　伸雄
——功利主義との対比——

仮象と反省　山脇　雅夫
——ヘーゲルの矛盾概念の理解のために——

第二号（一九九五）

カント哲学における「経験」概念について　福谷　茂
——「世界」概念導入のための端緒として——

ヘーゲルのコルポラツィオーン論　早瀬　明
——市民社会の団体主義的変革に向けたヘーゲルの試み——

工学はどういうタイプの学問か　齊藤　了文

信仰の情熱とその逆説　田中　一馬
——キェルケゴール『おそれとおののき』におけるアブラハム解釈をめぐって——

ハイデッガーのヘーゲル解釈　橋本　武志
——意識の二義性と意識の転換——

第三号（一九九六）

『全知識学の基礎』の到達点　子野日俊夫

読書人世界から学者共和国制度へ　福田喜一郎
——理性を制度化しようとしたカントの試み——

デカルトにおける愛の区別について　武藤　整司

未済の人倫　石田あゆみ
——『精神の現象学』主—奴論の一解釈——

ガダマーのディルタイ批判　折橋　康雄
——『真理と方法』を中心に——

第四号（一九九七）

一本の綱（Seil）としての人間　吉川　康夫
——ニヒリズム状況下に於ける人間と社会の問題——

デカルトの懐疑について　安藤　正人
——『省察』の「反論と答弁」を資料として——

市民と国家の媒介　小川　清次
——「国民」形成の一側面——

『存在と時間』に於ける可能性概念の多義性について　橋本　武志

自然主義的存在論の隘路　次田　憲和
——フッサールの「領域的存在論」における超越論的構成の「自己関係的構造」——

第五号（一九九八）

「常に誤る」と「時々誤る」　武藤　整司
——デカルト的行論の一考察——

ディルタイに於ける客観的精神の概念について　折橋　康雄
ハイデガーの他者論　安部　浩

第六号（一九九九）

デカルトにおける《真理》と《存在》　倉田　隆
——明晰かつ判明に知得されるもの——
ヘーゲルの根拠論　山脇　雅夫
——知と存在との相即——
「第五省察」の隠された論理　次田　憲和
——フッサール『デカルト的省察』における「他者構成論」理解のための一視座——
シェリング哲学の出発点　浅沼　光樹
——人間的理性の起源と歴史の構成——

第七号（二〇〇〇）

——薗田　坦教授　退官記念号——

薗田　坦教授　略歴・業績一覧
《講演》
近世哲学における神の問題　薗田　坦
近世哲学とはなにか　福谷　茂
——新しい哲学史像のために——
人間の輪郭　武藤　整司
——その曖昧さを擁護するために——
知の自己吟味　山脇　雅夫
——『精神の現象学』緒論における知と即自の区別について——
ハイデッガーの良心論再考　橋本　武志
——可能性概念を手がかりに——
生と音楽　折橋　康雄
——ディルタイに於ける生と音楽の時間性の問題をめぐって——

第八号（二〇〇一）

自由の軌跡　北岡　武司
——批判哲学における自由の可能性の意味——
認識か解釈か　福谷　茂
——新しい哲学史像のために（二）——
G・ハーマン相対主義説の論理　田中　一馬
歴史的理性の生成　浅沼　光樹
——シェリング『悪の起源』における神話解釈の意義——

《書評》
北岡武司著『カントと形而上学——物自体と自由をめぐって』　橋本　武志
N・ケンプ・スミス著（山本冬樹訳）『カント『純粋理性批判』註解』　長田　蔵人

第九号（二〇〇二）

『存在と時間』と哲学の方法（形式的挙示再考）　田中　敦
フッサールにおける他者経験の構造と発生　榊原　哲也
ウィトゲンシュタインの「規則に従う」論の若干の考察　子野日俊夫
復古のもとでの立憲主義　竹島あゆみ
——ヘーゲル法哲学講義（ベルリン一八一九／二〇年）の二つの講義録——

《書評》
ヤーコプ・ベーメ著（薗田　坦訳）『アウロラ——明け初める東天の紅』　福谷　茂

第一〇号（二〇〇三）

十年の歩みを顧みて　薗田　坦

デカルトと自覚の問題
——コギトの弁証法性——　実川　敏夫

アレゴリーの復権をめぐって
——ガダマーとポール・ド・マン——　高田　珠樹

行為の規範としての礼節（decorum）の意義
——クリスチャン・トマージウスにおける法・道徳・礼節の区別——　福田喜一郎

格率とその「枠組み」
——カントの道徳判断論の新しい理解を目指して——　西川小百合

《書評》
福居　純著『デカルト研究』　浅沼　光樹

第一一号（二〇〇四）

カントにおける崇高の経験　牧野　英二

イデオロギー批判の技術哲学
——マルクーゼ・ハーバーマス論争を手掛かりに——　橋本　武志

感性の弁護（Apologie für die Sinnlichkeit）とは何か
——カントの「直観」概念の見過ごされたアスペクト——　長田　蔵人

『純粋理性批判』の反実在論的解釈
——その内実と意義——　千葉　清史

《書評》
武藤整司著『人間の輪郭—共生への理念』　吉川　康夫

第一二号（二〇〇五）

形而上学的認識と超越論的認識
——カントと認識の形而上学・序論——　大橋容一郎

「この私」はなぜ謎を呼び起こすのか
——私に付属する性質が消去された視点からの考察——　沖永　荘八

反現象学の道
——フランツ・ブレンターノにおける非超越論的現象学と個体主義的存在論に基づく直接実在論的認識論について——　次田　憲和

超越論的反省とは何か
——「反省概念の二義性」章の三段構造とその意味——　佐藤　慶太

第一三号（二〇〇六）

根拠律批判から理性批判へ
——「ア・プリオリな総合」の起源をめぐって——　石川　文康

ショーペンハウアーにおける〈物自体としての意志〉概念の導入
——意志の否定と道徳の両立のために——　多田　光宏

《書評》
三つの『純粋理性批判』新訳　佐藤　慶太

第一四号（二〇一〇）

ヒュームの認識論についての覚え書き

小林　道夫
——デカルトの認識論との対比において——
ライプニッツの創造論（一）　福谷　茂
無制約者と知的直観（一）　浅沼　光樹
——『ティマイオス註解』から『自我論』へ——

第一五号（二〇一一）

意志の無限後退論　久呉　高之
——ライルと意志理論——
歴史・時間・事実　福谷　茂
——哲学史研究のための予備的考察——
無制約者と知的直観（二）　浅沼　光樹
——『ティマイオス註解』から『自我論』へ——

第一六号（二〇一二）

カント倫理学における「方法の逆説」と人権の問題　御子柴　善之
叡知的性格における心術の唯一性と根源悪　福田　喜一郎

第一七号（二〇一三）

承認と和解　竹島あゆみ
——ヘーゲル社会哲学の二つの原理——
ライプニッツの創造論（二）　福谷　茂

編集委員会
委員長　福谷　茂
委員　林　拓也
太田　匡洋

執 筆 者 紹 介

千葉　清史　　山形大学准教授
浅沼　光樹　　京都市立芸術大学非常勤講師

（執筆順）

近世哲学研究　　第 18 号

2014 年 12 月 25 日　発行

編集・発行　近世哲学会
編集代表　　福谷　茂
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
京都大学文学部
西洋近世哲学史研究室内
http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/modephil/
TEL（075）753-2444

印 刷 所　大学生協京都事業連合
ブックプリントセンター
〒606-8106 京都市左京区高野玉岡町 23-3
TEL（075）711-3839

定価 1200 円（本体 1112 円）

STUDIES
in
MODERN PHILOSOPHY

No. 18

Kiyoshi CHIBA : Zwei-Welten- und Zwei-Aspekte-Interpretation 1
—— Worum handelt es sich eigentlich?——

Kouki ASANUMA : Keiji Nishitani 36
und seine Einsicht in die Philosophiegeschichte
—— Die Philosophie der Kyōto-Schule
und die Geschichte der Philosophie ——

2014

Published by
Society for the Researches
in the History of Modern Philosophy